

一面よりつゞく、
は其家庭から見ても、大に考慮を要すべきものであり、大問題でもあるのであり、此意味に於て、女子が萬已むを得ず、職業戦線に立たなければならぬ境遇にあるとしても、小學校教員は、避けるべきで、皆様に之を要するに、皆様に女學校四ヶ年の教育を、賢母たる資格をさへ得て居れば、將來どんな境遇に立ち得るものと思はれます。而して若し幸に、皆様のうちで、専門教育をうけさせ、其學費を其儘そつくりいたして、堅實なる利殖の道を講じ、將來萬一の場

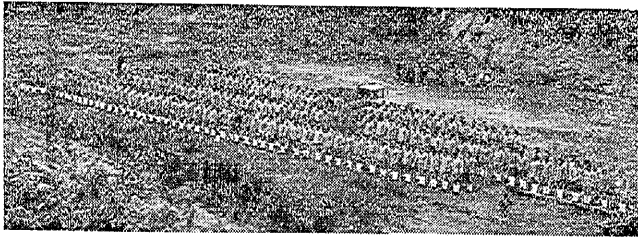
第二磐炭長倉開坑

一年記念觀楓行軍

(記録係 勞務 山下政次氏手記抄録)

多年の廢坑によつて、秋風落莫の觀あつた長倉坑も、第二磐城炭礦によつて復活せらるゝや、前川坑長石橋勞務主任以下關係者一同の協戮邁往をモットとして、の、精勵努力の結果、稼働人員三百數十名、坑外夫を合せて、千有余人の従業員を有する、一大炭礦と化し其作業も生活も、軍隊的に

合の準備資金とすることが最も賢明であり、安全なる方法であると思はるゝのであります。
希くは皆様、卒業されて十年後には、何れも打揃ふて申分なき良妻賢母となつて下さい。一家をよく齊ふるは勿論、御愛兒の御教養に専念精勵せらるゝ御教養に卒業生が上級學校に多くは居る事なごを以て、一の名譽でもあるかの様に、思つて居る人々もなきにしもあらずであるが、其は大なる真價は、一人でも多上の成妻賢母を出す事が最上の成績といふべきであります。又かくある事が、眞に一身一家の最大幸福であり、眞に國力充實の基礎ともなるのであります。



景光列整隊楓觀員業從坑倉長

部隊、救護班及統監部之に伴ひ、六時半全員整列、前川坑長より、從來の成績、將來の方針、行軍の目的等に就いて、簡にして要を得たる訓示、北山隊長より行軍上の諸注意等ありて、隊伍整々又堂々、進軍喇叭に

村 會

十一月十二日村役場議事室に開會、村稅督促及督促手數料條例設定、寄附採納、十年度歲入出追加豫算の三件につき審議決定した。其内追加豫算額は左の通りである。
歳入、一、二一四圓、追加豫算額、一三二、一七圓
已定豫算額、計一三三、三五圓
歳出、一、一八、五二〇圓、經常部已定豫算額、一、〇一四圓、經常部追加豫算額、二〇〇圓、臨時追加豫算額計一三三、三五圓以上

家政女學校の展覽會

内郷家政女學校にては、創立十年を記念する爲、十月二十六七日にわたり生徒作品の展覽會を開催。出品点数一、一八九、入場者一三六五、作品賣上八圓九七錢、食賣賣上三圓四七錢、下足料三圓四七錢、計一六圓六七錢の收入を見ゆるの盛況をいたしたる由。因みに同校在籍生は一三五名を算し、最近縣青年學校作品展覽會に十七点出品して十五点の賞状と、外に裁縫競技成績優良賞を得たる由。好成績といふべきである。

方面事業會議

十月二十一日方面委員助成會支部長聯合會議を役場に開催、講演會開催其他重要な事項につき審議決定した。

佐藤氏の奇特

佐藤三平氏は、第三小學校

勝の紅葉清流を飽く迄觀賞して、午後三時餘間に響きわたる曉々たる集合喇叭によつて、一同整列点呼、忙中の寸閑を割きて參加したる、菅原取締役兼所長の檢閲ありて、全員汽車に搭乗車中四十分は正に歡樂境、湯本驛に下車して、予定通り五時四十分歸還、前川坑長の感想希望を述べたる挨拶ありて解散した。

の教育に資する爲、フレーム壹枚(價格壹百圓)の寄附を申出て、村會に於て之を嘉納した。

日本評論社

發行所 東京橋本三丁目
取次所 内郷村報社

内郷村報社

専校を聘して、十月一日より同三十日迄、竹ノ内職員合宿所に於て、榮養講習會を開催した。受講者百八

村稅督促條例

教育制度改革概論

(四六版二二頁 定價五十錢 郵稅六錢)

矢野 恒太郎 大内民惠著
服部宇之吉

我國教育學界の概観
前京大總長小西重直博士
書を寄せて曰く、多年ノ御懇願下實地ノ御試練ニ基ク眞摯愛國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思感激ニ打テ申候云々

發行所
取次所

専校を聘して、十月一日より同三十日迄、竹ノ内職員合宿所に於て、榮養講習會を開催した。受講者百八

せられて、高野に遠足をし

内田鐵相來山

十一月二日午後二時七分、内田鐵道大臣來山、淺野翁

別項掲載の通り、村會に於て左の如く、村稅督促及督促條例を施行するにヨリ之ヲ

奏慶三郎氏

合せて、千有余人の従業員を有する、一大炭礦と化し其作業も生活も、軍隊的に

北山技手之を率し、女子行動をとつて、名たゝる名

の事項につき審議決定した

佐藤氏の奇特 佐藤氏氏は、第三小學校

◎本紙贊助金寄贈芳名 金拾圓 二本松 野地 菊司

矢野 恒太郎 大内民惠著 教育制度改革概論

行き詰れる現代の教育制度を解して、學理を實際と、歴史を實際とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同校舉に違あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威 前京大總長小西重直博士 書を寄せて曰く、多年御體験下實地ノ御試練ニ基ク眞學眞國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思議敬ニ打テ申候云々

發行所 日本評論社 東京橋本三丁目 取次所 内郷村報社

村税督促條例

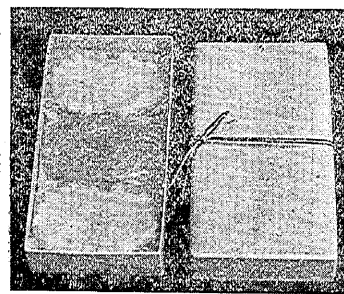
別項掲載の通り、村會に於て左の如く、村税督促及督促手數料條例を制定した。

第一條、本村ニ於テ徵收スル村税ヲ定期内ニ完納セザルモノアル時ハ納期限後二十日迄ニ村長ハ督促狀ヲ發ス。第二條、前條ノ督促狀ニハ七日以内ニ於テ期限ヲ指定ス。第三條、督促狀ノ指定期限迄ニ税金及督促手數料ヲ完納セザル時ハ二十日以内ニ滞納處分ニ着手ス。第四條、條督促狀ヲ發シタル時ハ手數料トシテ一通ニ村金貳拾錢ヲ徵收ス。第五條、本村以外ニアル滞納者ニ對シテハ前條ノ外脚夫ヲ以テスル場合ハ其里數ニ應ジ一里毎ニ金拾錢郵便ヲ以テスル場合ハ其實費ヲ増手數料トシテ徵收ス。第六條、督促手數料ハ別ニ納額告知書ヲ發セズ徵稅令書又ハ之ニ準ズベキモノニ併記シ滞納金ト同時ニ之ヲ徵收ス。第七條、町村制第百拾壹條ノ規定ニ依ル稅外收入ノ督促及督促手數料ニ關シテハ第一條乃至第六條ノ例ニ依ル。

精神作興講演

日本勞務者教育協會、磐城炭礦、古河好問炭礦、磐城新宿御苑拜觀 民惠

予は十月二十三日より四日間、東京に開催せられたる社會事業大會に、縣代表の一人として出席し、其第一日に新宿御苑の拜觀を許さ



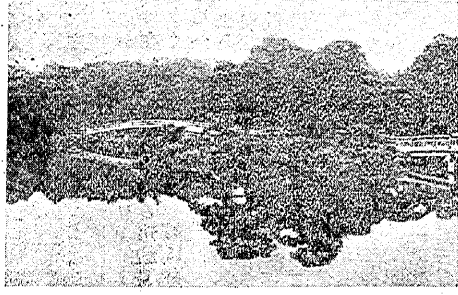
予は十月二十三日より四日間、東京に開催せられたる社會事業大會に、縣代表の一人として出席し、其第一日に新宿御苑の拜觀を許さ

内田鐵相來山

十一月二日午後二時七分、内田鐵道大臣來山、淺野翁頌德記念館に於て、菅原鐵業所長より、事業概況を聴取し、同二時二十五分出發

修養園講習會

幹事 長塚絅二郎 心の糧を求めて隣人愛に生きよと云する同志二百五十三名よりなる我が修養園は、去十月六七兩日日本部より講師尾形榮造先生を聘して講習會を開演致しました。



島田兼吉氏息信勝氏は、過

學位論文通過

專校に聘して、十月一日より同三十日迄、竹ノ内職員合宿所に於て、榮養講習會を開催した。受講者百八十名にして、来る二十四日淺野翁頌德記念館に於て、修了證書授與式を舉行の由

敬老會

内郷村主催、警察後援下に十一月五日淺野翁頌德記念館に於て第三回敬老唱歌會開催、村内四小學校兒童の唱歌遊戯を觀覽に供し、特に高坂校尋四の八岐の大蛇劇は喝采され、折詰晝飯菓子折等を贈つて慰安した。因に村内には七十一歳以上三百四十四名あり、本日の出席者は二百五十四名。

濱崎磐炭副所長

十月二十六日より鎌先温泉に入浴静養、十一月九日歸山した。

田口つや子女史

内郷家政女學校の同女史は十一月十日濱三郡教育會より、三十ヶ年勤績の表彰をうけた。

警青の遠足

十一月三日の明治節を卜して、警察男子青年會員百四十二名は、田中副會長引率の下に、夏井川谿谷に、又女青年會員四十三名は、井上高坂女子青年會長に引率

榮養講習會

警察健康保險組合にては、榮養健康研究所榮養士茂木 迎した。各小學校六年以上及礦業所職員五十四名之を歡

附 則 本條例ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス。本村督促手數料條

れ、特に、兩陛下の御恩名により御菓子拜受の光榮に浴し、皇恩の掛けなきに感泣したのであつた。掛巻くも畏こかりけり許されしきけふ御園生をおがむうれしき

セメント四倉工場各支部主催で、第三回全國勞務者精神作興週間實施の爲め、十一月十日の克己デーを期して、本部より宮崎說成氏を聘して、淺野翁頌德記念館に於て、國民精神に關する講演會を開催した。

敬老會 内郷村主催、警察後援下に十一月五日淺野翁頌德記念館に於て第三回敬老唱歌會開催、村内四小學校兒童の唱歌遊戯を觀覽に供し、特に高坂校尋四の八岐の大蛇劇は喝采され、折詰晝飯菓子折等を贈つて慰安した。因に村内には七十一歳以上三百四十四名あり、本日の出席者は二百五十四名。

濱崎磐炭副所長 十月二十六日より鎌先温泉に入浴静養、十一月九日歸山した。

田口つや子女史 内郷家政女學校の同女史は十一月十日濱三郡教育會より、三十ヶ年勤績の表彰をうけた。

方面專業觀察記

田口淳三

一、日時、十月四日午前五時出發、午後九時歸還。
二、視察地、茨城縣新台郡石岡町
(茨城縣指定)

杉山氏を悼む

草野三千雄

前内郷村在郷軍人分會長杉山炭礦主杉山今朝吉氏は、十月二十七日、列車覆覆の奇禍に遭ひ、前途有爲の才を抱いて溘焉として易簣す。異に哀悼の情に堪へず。

開拓記

北海道十勝國上川郡清水村北清水

大内一郎

拜復 先日御手紙有難う御座いました。杉田の從軍記念塔も、地鎮祭迄に進展いたしました事は誠に喜ばしい御座います。此頃は天候も續きさうになりましたので、收穫作業も仲々忙がしくなりました。落葉も大體脱殻も済み、蕪麥は未だ半分位です。稻黍も刈り取つて積みまじしたし、大手も今日刈り終り、明日は大豆刈り進みます。土橋架けや排水道路修繕に出て、又馬車やバス運搬もなすまいとしました。昨日は例の註文の大根二圓四拾錢分を賣

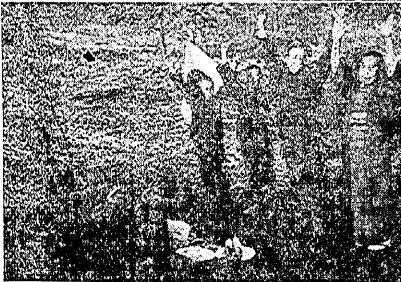
り五十嵐商店から上等の餅搗き白月の用意も出来ました。之でお正月の用意も出来たので、私には天昨日も註文があつたので、私は天気がよく忙がしいので、信敬兩君に行つてもらひ、三圓四拾錢の収入がありました。母も相談の上、全収入より肥料代種子代並慰安費(前回の菓子(の)き)を差引いた純利益金の一割宛を、兩君の貯金にしてやる事にいたしました。御面倒で、兩君の御印をいたしました。送つて下さる様御願ひいたします。梨、サンマは買ひうまう、大喜びで食へて居ります。母から知合

の方々にわけてあげましたが、中には始めて見たといふ方もありました。何れ又。
敬具
十月十日夜
拜復 新宿御苑御拜觀記念の繪葉書有り難う御座いました。又母へ



(日七月九) 劉 麥 燕 信 夫 敏

のお便りによつて、兄上姉上も御健なつた事を拜承、誠に喜びに堪へません。
去る二十五日敏夫君の御祖父が急逝された御通知があつたので、葬儀に當りたる二十五日の午後二時敏夫君自書「鈴木梅吉靈位」を佛壇に安置、一同参列、修證義並に警若心經を讀誦して、心から追悼いたしました。猶午後には敏夫君に休んでいただきました。昨日は支應より大庭技手が参られ、開墾地を測量して行かれたので、其二三日前に立會通知があり、役場に於てそれが小生の處がトップであつたので、大いに助かりました。
昨日盛瀬次郎叔父さんから、國本神社に奉納する様に、左の一首を添へて、新米一袋を御寄贈下さいました。
新しき米をさへ上げて祈るかな
君が館の幸おほかれ
之は明治節の日に奉供いたしたいと存じます。當日は例の如く盛大なる式を挙行いたすべく、毎夕奉



式節治明の前社神本國 夫敏雄信 耶一みき

祝歌練習中です。
其後の大根ですが、全収入拾六圓余、純收十二圓五六拾錢で御座います。帯廣(ト)ラックで五千本出荷(一本八厘)する段取りでした。惜しいかな少し小さいので見合せとなりました。御世話になつた近慮の方々に三千五百本許り差上げました。目下少し宛、干し大根凍大根等も作りつゝあります。後は團ひ大根として二回賣り出す位にて、大體終了か存じます。今日はこれで失禮いたします。
十月二十九日夜

本紙發行は内郷一隊の事業に於て、其の社務は子孫に對する遺言を授かるものなり。
其何れにしても、虚榮心や自己を檢討して、御両親や先生方達の御指導を仰ぐべきは勿論、くれぐれも女

内郷村報の

六大使命

- 一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
二、村内公私各機關の活動状況を報導し併せて其協調を計り、總観和總努力の實現を期す。
三、本村社會事業の徹底を期す。

- 四、村内の善美行を表彰し、且之を獎勵す。
五、本村に本村出資者及本村関係者との關係を計り、且其發展向上を期す。
六、餘力を以て、國民指導に當る。

本紙發行は内郷一隊の事業に於て、其の社務は子孫に對する遺言を授かるものなり。

本紙定価一紙五錢一ヶ月一圓一月一圓
發行所 茨城縣新台郡石岡町内郷村報社
印刷所 平活版所

村報
天法人則
伍と然るに世間には、新しい女子に

事をして、職業の第一線に立つ

岸に到達すべく、抜手を切

先生方達の御指導を仰ぐべきは勿論、くれぐれも女

内郷木幸

特別 附録

大楠公の忠烈を、並稱せらる、藤原藤房卿の墳墓が、發見せられ、闡明せられた事は、我國史界に對する一大貢獻であるは勿論、阪谷男爵を始め、我磐城炭礦關係者各位の協賛、亦其功を頌つべきものなるを以て、こゝに濱崎氏の、遺蹟建碑式参列記を乞ふて、本紙の特別附録とし、一般讀者諸子に、其概況を報導するこゝとしたのである。(記者)

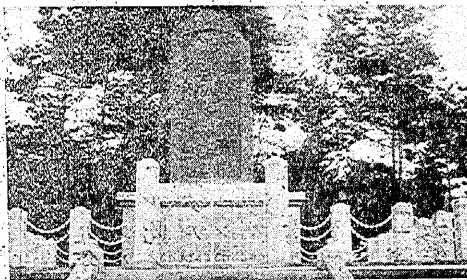
藤原藤房卿遺蹟 建碑式参列の記

磐城炭礦々業所 副所長兼事務部長 濱崎善三郎

曩に茨城縣岩間町に於て發見せられた藤原藤房卿の靈墳は、阪谷男爵の庇援の下に、全町民諸子及荒井庸夫氏等の、熱烈な盡力によつて、其所在因由を明かにし、昨年十月十日、五百七十二回忌を卜して、盛大なる慰靈祭を執行せられ、予も亦男爵の命を含み、其席末を汚したのであつたが、爾來一ヶ年を経たる、今日十月十日には前記諸氏並に我淺野社長前川専務を始め、全國有志の協賛献資を得て、卿の遺蹟碑を建立せられ、其

建碑式を舉行せらるゝ、予は、磐城炭礦々業所職員總代として、上原専務主任は、一般礦夫の總代として参列すべく、午前七時三十分八分綴驛を出發し、岩間に着いたのは、十時八分であつた。昨年の今日も、稀に見る好天氣であつたが、本年は秋に入つてから、霖雨続きで鬱陶しかつたにもかゝらず、今日といふ今日は、日本晴れの爽かなる日である。驛には受附があり胸に佩用する徽章を貰ふ。自動車を用意があつて、直

ぐに式場に赴く。今日のよき日を祝ふのであらう、沿道の各戸には、國旗が翻つて居る。式場の入口で下車して、先づ驚いたのは、塚全體の面目が一新して、見事なる大鳥居の聳え立つて居る。鳥居の聳え立つて居るは既に、小學校の職員兒童近郷のあらゆる各團體が参

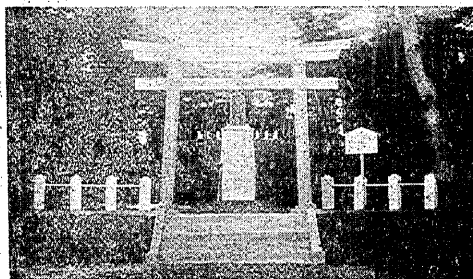


藤原藤房卿遺蹟碑

集して、其數千五百余名もあらんかと思受けられた。梅里町長は、しきりと配慮を配せられて居る。案内せられて、附近の大きな農家に到れば、座敷や庭の天幕には、多數の來賓があふれて居る。其内に特に

京か来て居られるこの事で、此處で町長によつて紹介せられた。氏の談によれば、男爵は昨年御参詣出来なかつたので、今年こそはと、それ〴〵御準備中であつたのであるが、いよいよ御出發の間際になつて、矢張り大事をとられた方が、およろしいと、醫師や側近の人々の、意見の一致により、遺憾ながら思ひ止まられたといふ事である。そして執事に向つて、「自分は行けないが、君が行つて、今日の有様をよく見て来て詳しく聞かせてくれよ」と申された由、今更ながら男爵の藤房卿に對する、熱烈なる御追憶の程、眞に感激に堪へない次第である。かくて午前十時半いよ〴〵開式となり、御塚の直前、竹矢來の外側に、諸員一同着席すれば、七名の神官、静々と威儀を正して、式場に入り来る。昨年は佛式なりしも、今年はずべて神式によつて、舉行せらるるのである。即ち五百七十二回忌、祥月命日に當り、建碑の除幕式と、御慰靈祭とを兼ねたもので、式次は左の通り舉行せられた。

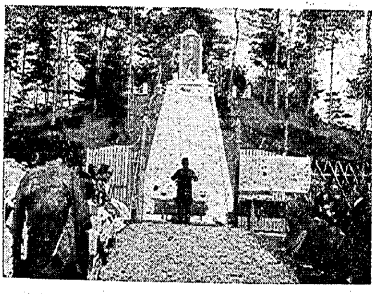
- 一、諸員一同参列
- 一、修 祓
- 一、降 神 (一同平伏)
- 一、献 饌
- 一、齋主祝詞奏上 (一同平伏)
- 一、主催者祭文奏上 (〃)
- 一、來賓祭文奏上 (〃)
- 一、齋主玉串奉奠
- 一、主催者玉串奉奠



藤原藤房卿遺蹟全景

- 一、來賓總代玉串奉奠
 - 一、各種團體代表玉串奉奠
 - 一、工事報告
 - 一、撤 饌
 - 一、昇 神 (一同平伏)
 - 一、閉會ノ辞
 - 一、一同退席
- 以上 (以下二面へつゞ)

男爵の祭文は、荒井先生が代讀せられ、献饌のすべては、男爵の供へられたものであつた。我椅子席より見上ぐれば、塚は廣くゆとりをとつて、石の玉垣がめぐらされ、其中央、高さ五尺ばかりの台石の上に、藤原 藤房卿遺蹟と、男爵の筆になる、鮮かなる筆致の、大文字が刻まれた、高さ一丈巾六尺



建碑式の光景

位とも覺ゆる、仙臺石の碑石が建てられてあり。塚下から約四十階位の、恰好よくしつらへた、石段の参道が設けられてある。塚には亭々たる松が点々そより立ち、芝生はきれいに刈られ、其の間に、數十本の榊が、残されてあるなど、またなぐゆかしさを覺ゆる。塚の前に廣場をとり、大鳥居と玉垣とを以て、之をくぎり

登り口には、頗る形の面白く、大自然石の手洗鉢が置かれてある。すべての配置がよく整ひ、一段と神々しさを加へ、昨年のもれに比して、隔世の感ありとてもいふべき程である。工事に報告の一部を、左に摘録すれば、曩に建武中興六百年祭に當り岩間町有志並に荒井

られ面目は茲に一新せられたり此男爵の誠意に感激したる地元北根區民諸氏は約三段歩の土地を寄附せられ其熱烈なる衷情誠に感激に堪へざるなり然るに今回阪谷男爵閣下淺野總一郎社長前川益以氏外各知名士より金壹千五百圓の淨捨により遺蹟の碑を建設し本日茲に其

七十二回忌に當り謹んで追悼の式典を擧げたり爾來各方面勤王の士は擧て此遺蹟を保存し其忠烈を表示すべきを渴望し凡ゆる援助鞭撻を辱うし阪谷芳郎男爵閣下淺野總一郎氏前川益以氏其他各位發起の下に永久に記念すべき嚴固たる記念碑並に石室神域の第一期建設を全

藤塚ノ碑 此地古來藤塚ト稱シ貴人ノ墓ト傳フ偶々昭和九年五月藤原藤房卿ノ俗名ト法號トヲ刻セルニ碑ヲ發見セリ思フニ卿ノ墳墓ト稱スルモノ各處ニ散在ス而モ概テ確證ヲ缺キ之ヲ史實ニ照シ事述ニ稽ヘ難ク微アル此ノ如キハ他ニ其比無キ所一部學者中尙肯認ラ客ニスル者アルモ卿ノ重要遺蹟タルヲ疑フ容レニ藤塚ノ稱亦空シカラザルヲ知ルニ足ル嗚呼卿ハ建武中興ノ元勳ニシテ實ニ我邦忠臣ノ儀範タリ一朝世ヲ遁レ杳トシテ消息ヲ絶テ志士仁人ノ憾ヲ遺スコト六百載爰ニ舉國一致中興記念ノ式典ヲ行ヒ忠臣義士ノ遺烈ヲ景慕セル年ニ當リ圖ラスモ卿忠誠ノ餘光ヲ此一坏土ニ仰クヲ得タルハ奇縁ト謂フヘシ乃テ有志胥謀リ新ニ碑ヲ建テテ卿ノ英靈ヲ慰メ併セテ忠臣ノ終始ヲ明ニスト云フ 昭和十年十月十日

正三位勳一等男爵 阪谷芳郎 撰
正六位勳六等 荒井庸夫 書
岩間史蹟顯彰會建之

庸夫先生の盡力により圖らずも此地に卿の墳墓を發見爾來土地を清め香花を供へ卿の英靈に對し敬意を表しつゝありしが計らずも阪谷男爵閣下より曩に藤塚整理費として金壹百圓を賜はり即ち男爵の御意思により青年團の奉仕を得木碑及其他玉垣を造營し以て周圍を清め

式典を擧ぐるは吾等町民寧ろ國民として多年渴望已まざりし忠誠の一念に燃ゆる卿の神前に拜するを得るは吾等町民の多幸たるのみならず我國全體の多幸ならずして何ぞ 梅里 町長の祭文の一節には又 昭和九年十月十日無等良雄禪師として逝きて五百

うしたり地下の英靈の感應も幾何ぞや嗚呼建武中興の當時を回想し藤塚の松影に無限の感慨轉た切なるものあり である。この報告及祭文の一斑を見ても、岩間町民諸氏が、藤房卿の御墳墓の發見と、阪谷男爵の御厚情とに、如何に感激して居るか想像するに餘りある次

第である。式後塚に登り、親しく碑石を仰ぎ見るに、湊川畔に、楠氏の墓石を建てたる光園公にも比すべき、我男爵の忠烈至誠が、其高雅にして、雄健なる御筆蹟に、歴々として現はれ正に藤房卿の御英姿を拜するが如く、思はず襟を正して、感嘆之を久うしたのであつた。碑の裏面には、別項掲載の如き、男爵の撰文 が刻まれてあつた實に千古の名文、



藤塚の石宮

一切を盡して、餘蘊なきを覺ゆ。而して台石の裏面に 發起者芳名 男爵 阪谷 芳郎 東京市 淺野總一郎 同 前川 益以 水戸市 荒井 庸夫 岩間史蹟顯彰會長 梅里 好文 協賛者芳名 警城炭礦株式會社 職員親交會員

同 五百五十七人
鑛夫親和會員 四千五百五十三人

このみ刻まれてあつた。其協賛者たる、我職員親交會と鑛夫親和會とよりは、前川事務の深き御配慮によつて、各三百五十圓つゝ寄附されたと拜承して居るが、真に有難い次第である。それから台石の左右兩側面には、賛成者として、政友會總裁鈴木喜三郎氏以下の氏名が、所狹きまで、刻まれ



阪谷男爵

てあつた。やがて我等は、再び先きの休憩所に請ぜられ、多数の來賓の方達と、午餐の饗應をうけ、坂上執事と親しく話をかはす機会を得、男爵に關する御事どもはる事を得た。其大要を摘録するに、男爵は各種公共團體の總裁とか、會長とかに、推戴せられて居る(此事は吾等が多年新聞紙上な

とで承知してゐて、よくもまあこんな澤山の肩書をと、平素驚いて居つ

祭文

謹白ス余カ先人朗應嘗テ藤原房卿ヲ詠スルノ詩アリ曰 誰使中興如乱麻 雲林豈敢忘天家 君王若問臣踪迹 爲奏松陰泣露華

朗應明治十四年没ス頃學ニシテ勸王ノ志深シ余其ノ遺志ヲ繼キ常ニ皇室ヲ尊崇シ團體ヲ擁護スルコトヲ志ス昭和九年建武中興六百年ニ當リ有志諸氏ト共ニ建武中興勳王諸士ノ遺蹟顯彰ニ付微力ヲ致ス夫レ建武中興ノ功臣ヲ論スルハ先以テ指テ藤原卿ト楠公トニ風スヘシ此二人同心一體王事ニ盡ス筈置ノ難ニ當リ藤原卿ト楠公トニ後醍醐天皇ニ推薦ス公感激召ニ應ス 天皇ヨリ討賊ノ事公ニ一任アリ公ヨリ「陛下有開正成未死也則母復勞宸慮」ト斷乎タル御答ヲ申上ラレタリ時元弘元年八月ナリ次テ北條氏ハ

天皇ヲ隱岐島ニ遷シ藤原卿ヲ常陸ニ流シタルモ後楠公金剛山ノ舉兵トナリ北條氏亡ビ建武中興ノ業成レリ然ルニ建武元年冬ニ至リ藤原卿ハ意見容レラレサルヲ以テ官ヲ棄テ遁世セラレタリ此後楠公孤立トナリ公ノ建築行ハレズ終ニ湊川ノ戰死トナリ南風不競ニ陷レリ楠公ノ最後ノ頗ル花々數世ノ同情ヲ集ムルニ引得ニ藤原卿遁世後ノ消息ハ六百年後ノ今日ニ至ルマテ終ニ知レテ然シナカラ微スカニ遺リタル種々ノ傳説ニ依ルニ卿ハ風花雪月ニ身ヲ委セス全國ヲ遍歴シテ各地勤王ノ志氣ヲ鼓吹スルコトヲ力メラレタルモノ、如シ果シテ然ラハ楠公ハ陽ニ藤原卿ハ陰ニ共ニ一身ヲ擧ゲテ終始王事ニ盡サレタルヲ疑フベシ

昭和十年五月二十五日楠公湊川戰死六百年ニ當リ盛大ナル記念祭舉行アリ然ルニ藤原卿終焉地今日ニ至ルマテ未タ確定セス卿ヲ弔スルニ由リシ余深ク悲哀ヲ感ス偶々昨年茨城縣西茨城郡岩間町ニ於テ卿ノ墳墓ト認ムヘキ遺蹟發見アリ岩間町長梅里好文氏來リ其顯彰ニ付援助ヲ求メラル余頗ル其ノ舉ヲ贊シ友人淺野總一郎前川益以諸氏ト共ニ先以テ記念碑ノ建設ニ盡カス今ヤ工事落成ヲ告ケ今年十月十日藤原卿五百七十三回祥月命日ニ於テ落成式ト共ニ祭典ヲ行フ嗚呼此舉アリ以テ聊カ卿ヲシテ徒ニ松陰露華ニ泣カシムルニ止マラサルヲ得ン乎余等同人ノ悦知ルヘキナリ謹テ卿ノ墓前ニ無辭ヲ呈シ卿ノ靈ヲ祭リ併セテ余ト志ヲ同ワスル世ノ勤王ノ士ニ告グト云爾

正三位勳一等法學博士男爵 阪谷芳郎

頓首々々

た次第である)が、世の常の總裁とか、會長とかとはことかはり、男爵が

お世話させらるゝのである。従つて男爵が、一度總裁とか、會長とかにな

一旦引き受けたとなると徹底的に内容まで立ち入りつて、どこくまで、

られた團體は、必ず其成立を見るは勿論、其基礎は確立し、寄附金の集りの如きも、非常によいことである。男爵は大藏大臣在職當時より、湊川神社に關係せ



社 長 淺野總一郎 氏

られて、非常に盡力せられたので、今以て神戸地方の人々は、男爵の徳を敬慕して居る。その當時から男爵は、正成公はよいが、公と共に、建武中興の大忠臣である藤原卿は、御墓さへ未だに見付



專務取締役 前川益川 氏

からず、寔に御氣の毒に堪へないと、絶えず洩らされて居たのだが、たまに荒井庸夫氏の書かれた藤原卿墳墓考を御覽になつて、これこそ確かな御墓だと、大に喜ばれ、

多年御胸中に鬱積せられてゐたところの、藤原卿に對する、御同情御景仰が、油然としてほとばしり出たものと、拜察さるゝのである。云々此の御話を聞いて、自分は全く感に堪へなかつた。吾々共は、現に在世中の人だとか、死んで間もない人などに對しては、同情もし、



昭和九年十月十日舉行 慰靈祭光景

御氣の毒だといふ感も、浮ぶことであるが、六百年も前に、逝かれた人に對してかくまでも同情を寄せらるゝ、男爵の深遠なる御心の程を、初めて承つて、今更ながら、無限の大教訓をうけた次第である。

願みれば、最早十七八年の頃、たしか大正六七年の頃

予がまだ學生時代、國家學會の記念講演會が、當時の二十九番かの教室で開かれて、大隈伯爵の後に、演壇に立たれた、時の東京市長阪谷男爵は、吾等學生一同に向つて、「諸君は現今日本の識者達が、一番憂ひとする所は、何であるかと問はれたならば、何と答へる」とあつた。私共ははてそんなに、日本の識者達が心配して居られることは何であらうと、一寸頭に浮び兼ねたのであるが、男爵は「それは日本の道徳の頹敗である」と結ばれたのであつた。

藤原藤房卿墳墓發見顛末畧記

大内民惠

讀者の參考に資する爲に、この略記を掲載する事とした。昭和九年三月十三日、茨城縣西茨城郡岩間町に於て、建武中興六百年記念日の當日、後龜山天皇の朝吉野朝の忠臣小田五郎が、岩間の奥の難蓋城に據つて、數萬の賊兵を一手に引きつけ、難戰苦闘、終に部下百余名と共に、壯烈なる戦死を遂げたといふ、其追用式を舉行し、越えて五月十八日其城址を永久に保存すべく追用碑并に銘碑奉安宮の除幕式を舉行した時、知事代理として臨席した藤原古澤一男氏が、元弘二年五郎の祖父治久

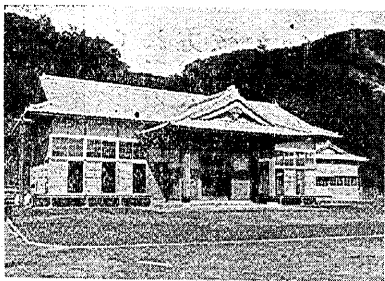
た。爾來今以て自分の頭の中には、當時の御風貌と共に、此の御話が深くこびりついて、忘れ得ない印象となつてゐるのである。斯様な深い尊い御精神が、御先考の御意思をつがれて藤原卿に對する、崇敬もなり、景仰もなり、又御慰靈祭や、建碑工事に對する、熱烈なる御盡力も、なつたのであらうなど、轉た無量の感にうたれたのであつた。かくて吾等は、滞りなく其任を果して夕刻歸還したのであつた。

る、銘碑を發見し、之を荒井囑託に鑑定を乞ひたるに、之は地中に埋葬されたもので、その上に必ず墓碑が建てられた筈であるといはれたので、それでは同一男爵、之が捜索に奔走し、數日後附近の竹藪の中から、「無等良雄位」に刻まれた墓碑を發見するに到り、之に荒井氏の研究考證が進められ、從來京都妙心寺を始め全國各地十數ヶ所に於て、藤原卿の墳墓と稱せられたものは、何れも其確實性を缺いて居たものであるが、藤原は銘碑墓碑共に完備するを以て、明かに其墳墓たる事を證するに足るといふ結論を與へらるゝに到つたのである。而して其「墳墓考」は、一、新に發見された藤原卿の墳墓、二、當陸に於ける藤原卿、三、藤原卿の過世、四、曹洞宗の展望、五、無等良雄神師、六、結語の六項に分ち、該博なる蘊蓄を傾けて、透徹せる討究考證を、簡潔達意の名文を以て綴られてある。又其附録として、岩間町長梅里好文氏の「藤原藤房卿墳墓發見始末」を添へてある。共に我國史上の一大文獻たる價値を有するものといふべきである。殊に吾人の意外の感にうたれたのは、從來史上に、出羽の藤原氏と稱せられて居つた、曹洞宗の第七世無等良雄神師が我藤原卿であつた事である。是亦我佛教史上の一大發見であるといふべきである。

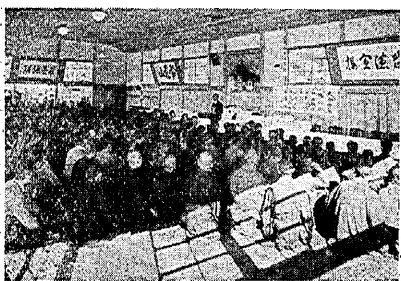
體育道場落成式

平野論

警城炭礦健康保險組合に於て、被保險者の保健施設の一端として、豫て參千九百餘圓を投じて、建設中なりし體育道場は、愈々竣工したるを以て、十月二十日午前八時半より、其落成披露を兼ねて、武道大會を開催した。當日は地方の名士百餘名が参集した。二百八十六名の選手によつて、柔剣弓三道の演武が開始せられ、劍道は、橋本統陽佐藤惣庄司政之根本正行漆野隆三郎五氏、柔道は、橋本芳太郎鷹崎正見岡田朝五郎草苅長三郎青天目源一郎中根武夫六氏、弓道は、青木清太郎柏原幸次郎赤津一麻原吉五郎猪狩喜平治五氏等、何れも斯



景全場道育體



景光の式成落 景抄の長事理時演

道場の内部は五十坪にして、中央に武神を祀り、其左右には淺野社長筆「養氣鍊膽」林大將軍「武徳宣揚」養氣鍊膽の三大額を掲げ、何れも筆力雄勁人をして自ら心身のひきしまるを覺えしむ。余名の來賓を迎へ、定刻振鈴と共に一同着席し、神前禮拜、國歌合唱、濱崎理事長の挨拶、來賓橋本鷹崎兩師範の祝辭あり、近郷より

道の大家が審判員となり、各道の師範がそれ／＼古來の型を示された後、劍道は高次試合、柔道は紅白試合、弓道は競射を演じ、何れも盛況を呈し、午后四時理事會田病院長の挨拶あり、萬歳三唱裡に閉會を告げた。